



(山形)

山形城跡の創建は斯波兼頼によるもので、延文元年（一二五六）にさかのぼる。以後斯波氏は地名をとり最上氏を名乗り、第一代最上義光の頃に最大五七万石の近世大名となるが、後に改易となる。その後譜代大名の交替地となり、水野家（五万石）で明治に至る。調査地点は本丸と二ノ丸をつなぐ大手橋地点である。橋は木橋で、遺構として一本の橋脚柱が現存している。

(1) 「寛政四壬子歳七月廿四日作之」  
1800×300×150 065

8 木簡の釈文・内容

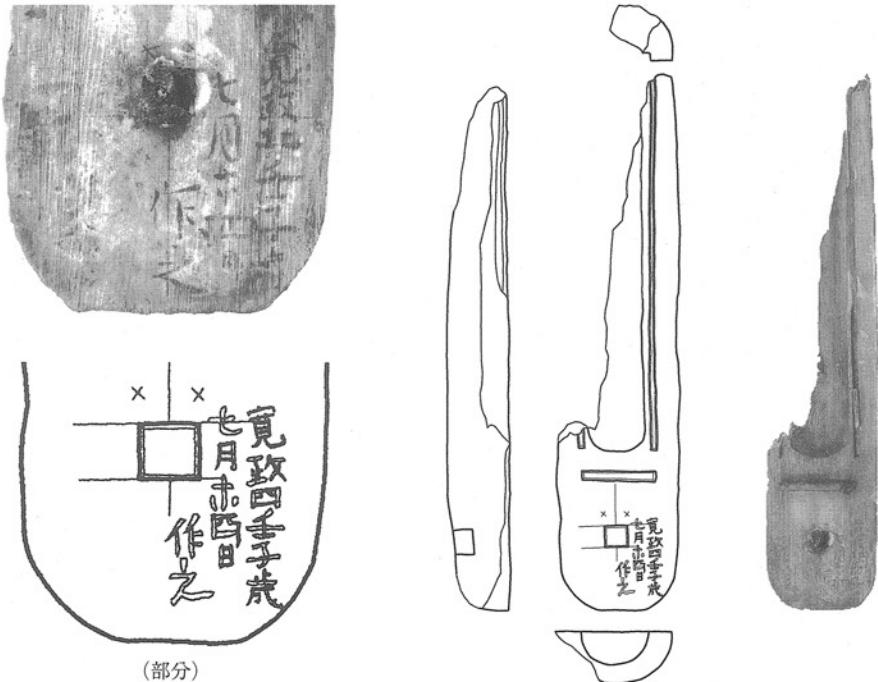
(五十嵐貴久)  
なお、本木簡の釈讀にあたつては、東北芸術工科大学の村木志伸氏のご教示を得た。

## 山形・山形城跡

やまがたじょう

- |                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| 1 所在地           | 山形市霞城町          |
| 2 調査期間          | 二〇〇三年（平15）五月～一月 |
| 3 発掘機関          | 山形市教育委員会        |
| 4 調査担当者         | 五十嵐貴久           |
| 5 遺跡の種類         | 城郭跡             |
| 6 遺跡の年代         | 中世、近世（六世紀～九世紀）  |
| 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 |                 |

材である。最大で長さ約一八〇cm直径約三〇cmの円柱状で、一本の柱を縦に二分割している。外面は一端が丸みを帯びた肩部を持つ閉塞的な状態であるのに對して、一方は中心部が削り抜かれ、接合すると円形の袋状の孔が開く。内面には両材を接合するための丁寧な細工が施され、接合後の部材のゆがみやズレを極力排除する意識が窺われる。主体部を構成する部材及び接合細材はアカマツであり、内部の接合材には一部にウルシ属などを用いている。墨書は片側の主体部の閉塞する端部側に記されており、その端部を下位にして倒立させた状態で正対する。この部材は橋に関連する可能性を持つが、詳細は明らかではない。



(部分)

『平城宮木簡三』に所収の三〇五八号木簡で、興味深い文字が判読されたので紹介する。某郡の贊荷札で、国郡名は読めていなかつた。保存処理・赤外線テレビカメラの活用により、釈読が進んだ。

国名の一文字目は「こ」と偏の文字で、旁には四本ほどの横画がある。郡名は「石取」か「名取」。「同四」四〇二四号木簡の「陸奥」字などと比較し「陸奥國名取郡」と確認した。また「御贊」の上は「布」と判読され、郷名でなく品名であろう。昆布と推測されるがその種類は不明。新釈文は以下の通り。

「陸奥國名取郡□□布御贊老籠□□ 天平元年＝  
＝十一月十五日」

3.9×2.5×6 031

(馬場  
基)

### 新たに釈読された陸奥国荷札木簡

